

【栗田病院 広報誌】

広報

こだま

2024

Vol.46



新年のご挨拶

理事長 栗田 裕文・院長 安部 秀三

広報散歩

サクラ病棟（精神科急性期治療病棟）

フォーカス くりた人

地域医療連携課
精神保健福祉士 呷野勝

創立56周年 記念事業



今号の「フォーカスくりた人」呷野勝さんの所属している地域医療連携課スタッフ

栗田病院グループ・理念 ～私達の求める姿～

私たちの使命は、患者様、利用者様、ご家族様、地域連携機関、地域住民、有朋会職員と
いったあらゆる方々の「こころ」に、温かな（ホットな）灯りをともすこと、笑顔を増やし続ける
ことです。その使命を果たすことで、以下3つの姿を実現します。

1. 医療・介護・福祉を統合した高品質のサービスを設計・開発し提供し続けている。
2. スタッフみなが有朋会の一員であることに胸を張っており、患者様、利用者様、ご家族様に
質の高いサービスを提供している。
3. 働きたい・学びたいと希望する方が絶えることなく集まってくる。



医療法人社団 有朋会
栗田病院

〒311-0117 茨城県那珂市豊喰505
TEL: 029-298-0175 Mail: yuhokai@yuhokai-kuritah.com
<http://www.yuhokai-kuritah.com/>



こだま
バックナンバーは
こちらから

理事長・院長より新年のご挨拶

理事長よりご挨拶

新年、明けましておめでとうございます。今年も、皆様へ新年のご挨拶が出来ますこと、とても嬉しく思います。

2023年(令和五年)について振り返りますと、COVIDの5類への移行を受けて、それまでの感染対策「辺倒から、行事や交流の機会を再開させてきた年でした。それを象徴するものが、マスコットキャラクターの誕生でしょうか。「くりたん」をどうぞ、末永く可愛がってくださいと、嬉しいです。



くりたん

また、2023年は、ChatGPT始め、AIが身近になってきた年でもありました。そう遠くない未来、AIは医療・介護に様々に活用されていくでしょう。一方で、COVIDパンデミックやonline偏重の経験から、人と人が実際に集う場所や機会、リアルに会うこと、人であれば生み出せないもの、等々の価値もまた、見直され、高まっていると感じています。2024年も、両者を共に見据えながら、運営に当たって参ります。

一年を通して、嬉しいことも、そうでないことも、様々なことがございました。そして、沢山の方々からのご支援や、新たな出会いや学びの機会に恵まれて、多くの実りを得ることが出来ました。これも、患者様・利用者やご家族様、連携をいただいております諸機関をはじめとした地域の皆様、そして栗田病院グループのスタッフの皆さん等々、沢山の方々に支えていただいている、応援をいただいているお陰です。本当にありがとうございます。

2024年の元旦には能登半



2024年の元旦には能登半

島で大きな地震があり、また1/2には日航機が炎上する事故が起きました。この場をお借りして、亡くなられた方、怪我をされた方、被災された方々へ、心からの哀悼とお見舞いを申し上げます。

このようなことがある時代だからこそ、「こころ」を温めることがより求められていると感じております。栗田病院グループの理念には「患者様・利用者様、ご家族様等々、たくさんの方々の「こころ」に、温かな(ホットな)灯りをとますこと、笑顔を増やし続けること」を使命として謳っています。私たちの手の届く限られた範囲ではありますが、今年も引き続き、その使命を全うし、「2050 vision」のキーマッセージ、「絆が奏でるこころの未来」の創造を目指して参ります。

「2050 vision」を目指し、理念を実践する歩みの中、全く平坦な道ではないように、これからは様々なことが(嬉しい)ことが沢山、そうでないものも、もしかするとあるでしょう。そして、俯いて下ばかり向いていても、笑顔は生まれません(使命を果たせません)。例えどんな状況であろうと、栗田病院グループが目指す、その先や使命には、何ら変わりはありません。使命をしっかりと心に留め置いて歩みを続けて学び、成長し、KSTP(栗田病院グループ中長期経営計画)を着々と進め、「2050 vision」を具現化し、「こころ」の未来を創造する。そんな2024年といたします。

今年も皆様と手を携えながら、共に歩んでいきたいです。ご指導、御鞭撻の程、よろしくお願ひ申し上げます。皆様にとつても、素晴らしい1年でありませう。本年も、どうぞよろしくお願ひいたします。

(理事長 栗田裕文)

院長よりご挨拶

新年明けましておめでとうございます。素晴らしい年となるよう皆様とともに新年を迎えたいと思います。院長としてより一層気持ちを引き締めて運営していく所存です。どうぞよろしくお願ひいたします。

昨年は新型コロナウイルス感染症の5類移行から平時に戻る

広報散歩

「サクラ病棟(精神科急性期治療病棟)」

精神科急性期治療病棟のサクラ病棟では、急性期症状の早期治療・早期退院に向けた集中治療を提供しています。今回は、地域医療の最前線としての役割を担うサクラ病棟の責任者渡辺さんにインタビューを行いました。

部署スタッフの紹介

精神科急性期治療病棟(以下、サクラ病棟)に勤務しているスタッフは令和5年11月現在で看護師・准看護師・看護助手・精神保健福祉士・病棟クラークの計32名で構成されています。その他に作業療法士が毎日病棟で勤務しています。

スタッフの中には精神科に興味を持ち、身体科より転職して働いている方もいます。前職の看護技術や知識を活かし、精神看護の分野でも活躍してくれています。アットホームな職場環境であるため、仕事で分からない事があっても周囲のスタッフがフォローしてくれる雰囲気があり、新人教育も成長の助けとなるようスタッフ一人一人が温かく指導に携わっています。

サクラ病棟は、一日一日が目まぐるしく変化します。我々管理者も、スタッフの心身ともに健康で働き、常に良い状態で仕事のパフォーマンスが発揮出来るようスタッフとの関わりを大切にしています。

サクラ病棟の役割と業務内容

サクラ病棟では、早期治療により、入院患者様の3か月以内の退院を目指しています。

当院へ新規で入院される患者様のほとんどはサクラ病棟への入院となるため、令和4年度の入院患者数は年間



サクラ病棟 看護師 渡辺洋師長

247名。一月では約20名の方が入院されます。

入院患者様の疾患別割合は、全体の約半分が統合失調症・妄想性障害で、次いで躁うつ病の気分障害となります。入院形態は医療保護入院が多く、次に任意入院、措置入院、鑑定入院となります。患者様の平均年齢は55歳前後で10代から90代の方まで幅広く入院されています。

精神症状が活発な急性期では薬物療法を行い急性期症状の緩和に努めています。また休息も大切であり、個室などの静かな部屋で休んでいただいています。

精神症状が落ち着き積極的に治療が始まる安定期では、規則正しい生活を取り戻せるように日中は作業療法を行う活動を促しています。また、主治医と一緒にご自身にあうお薬の調整を行っています。

社会復帰へ準備を行う退院準備期では、「また入院したらいかがい」「退院して大丈夫だろうか」と不安になることも多いかと思えます。その為、病気や薬の理解、ご家族との関係やご家族の病気に對する理解、社会資源の活用方法など課題を一緒に解決することで、患者様、ご家族様が安心して退院を迎えられるようにサポートしています。

現在力を入れている取り組み

現在サクラ病棟で力を入れている取り組みは、精神科病院イメージの改革と入院環境の改善です。

初めて精神科に入院する患者様ご家族様の中には、「こわい」「くらい病室」「大きな声をあげている人がいる」「鉄格子がある」など、精神科に対しネガティブなイメージをお持ちの方がとても多いです。昔からの精神科に対する古いイメージや間違った情報が伝わっているのだと思えます。

そこで、実際に入院を経験した患者様やご家族様から「こわい」と思っていたけど、イメージしたような悪い環境ではなかった」「もっと早く入院すればよかった」などのポジティブな情報が、精神科に抵抗をもっている身近な方々に伝わるような取り組みを検討しています。

入院環境の改善については、今まで治療に不要と判断される物の持ち込みは厳しく制限されていましたが、患者様からも制限が厳しすぎるとご意見をいただくこともあり、持込制限の緩和を行う事としました。

なかで様々な反動が起きました。様々な物価高騰、人手不足、様々な感染症の流行など変化の多い1年でした。



院長 安部秀三

当院としては、病院や関連施設において精神医療・福祉、認知症医療・介護を通して地域の様々な課題への対応をしています。長年地域の精神的な課題として、精神科救急対応の充実が挙げられ、県内精神科病院でぐる輪番制の対応について当院の対応日数を増やしております。アルコール関連障害についても「専門医療機関」として対応しています。認知症に関しては、主にBPSDで対応が難しい病態に対する治療ケアを中心にかけつけの先生方から紹介を受けております。またクリニックでは主に働く世代や若年者のメンタルヘルスに对应し、地域の事業所において高ストレスと判定された職員さんについて当法人にて面談対応もしています。

地域の表情が変化していくなか精神医療メンタルヘルスのニーズは広がりがみられておりますが、現状は全国的にとりわけ本県ではその担い手が十分でない状況です。現状初診の依頼の際にはしばらくお待ちをせしめようことが、当院の課題であると考えています。現在当院は精神科専攻医の研修医療機関であり、毎年1-2人を受け入れて地域で活躍できる精神科医を育てており、少しずつ対応数を増やせていくよう取り組んでおります。

今年には診療報酬を含め介護福祉のトリプル改定があります。改定では精神科救急の充実、難治性の病態への積極的治療の推進、地域の身体科医療機関と精神科医療機関との連携などは今後継続的に評価されるものと考えております。今後とも当地域の精神的な課題に対して医療機関、医師会、自治体、関係団体などと連携をとりながら積極的に取り組んでいきたいと考えております。

多くの専門職種の力を結集し、当法人が精神科医療機関としてより一層信頼される法人となるよう取り組んでいきたいと思えます。職員各々の日々の自己研鑽や地域の方々との連携・対話に努めつつ、これまで以上に柔軟な発想のもとさまざまなニーズに对应できる法人を目指し取り組んでいきます。ぜひ本年もよろしくお願ひ申し上げます。

(院長 安部秀三)

その一つが2022年より開始した携帯電話の制限緩和です。携帯電話の普及率は9割以上で、ほとんどの方が携帯電話を持っています。入院前まで生活の一部となっていた携帯電話が入院を機に使用できなくなることは不安と治療意欲を低下させてしまうと感じていました。入院中に携帯電話を使用できるようにすることで少しでも精神科入院に対するハードルを下げたいと思い今回の取り組みに至りました。



サクラ病棟スタッフ

サクラ病棟の今後の目標と展望

近年、入院患者数は減少傾向にあります。これは当院に限らず、精神科病院全体の傾向です。今までは統合失調症や気分障害の患者様を中心に治療を行っておりましたが、現在当院では、アルコール依存症に対する入院プログラムや治療抵抗性状態に対する治療薬クロザリル導入などを開始しています。より専門的な疾患の治療を行う事で、今後も地域のニーズにえられるよう幅広い疾患の受け入れを行えるようにしていきたいです。

幅広い疾患の受け入れにあたり、スタッフへの疾患教育はとても大切です。患者様が安心して治療に専念できるようにスタッフへの疾患教育にも力を入れていきたいと考えています。正しく疾患を理解することで治療の質は向上していきます。患者様ご家族様がサクラ病棟に入院して良かったと、こころから思っていただけのような看護が提供できるようスタッフの知識技術の向上に努めていきたいです。

フォーカス くりた人



地域医療連携課 精神保健福祉士 畔野勝

当院で働く、現場職員の声をお伝えします。

配属部署での役割や活動、担当業務

私は、精神保健福祉士として入職し今年で7年目となります。これまでに、自立訓練施設、精神科急性期治療病棟、精神療養病棟などたくさん経験を重ねてきた大きな経験は地域医療連携課で勤務しています。

地域医療連携課での業務は、受診や入院の相談をはじめ、通院患者様の生活や制度の相談、新患診察の予診などを行っています。ご本人ご家族施設職員・行政職員等の様々な立場の方から多方面の相談を受けており、それぞれのニーズに応じたサービスの情報提供、必要な機関への受け渡しなども重要な役割の一つです。

また、栗田病院は医療観察法の指定医療機関となっており、その関連業務にも携わっております。具体的には、精神障害により重大な他害行為(殺人、傷害、放火等)を行ってしまった方の社会復帰に向けて、関係機関との定期的なケア会議の実施、外来受診時の声掛け、クライシスプランの更新等を行っています。

患者様との関わりで心がけていること

普段の業務の中で意識していることは大きく二つあります。一つ目は、患者様一人ひとりにあった適切な相談対応です。相手が何を望んでいるのかを考えながら、相手が理解しやすいように簡潔にお話しするようにしています。言葉のニュアンス、声のトーン、話すスピードなども重要です。二つ目は、相手の気持ちに寄り添った声掛けです。患者様の相談の多くは、調子が悪い時や不安が強い時にご連絡をいただきます。まずは、辛い気持ちを表出していただいたことに感謝しつつ、お話を傾聴し、時には適切な言葉を掛

けられるように心がけて対応しています。

精神保健福祉士としてのやりがい

これまでたくさん部署を経験させていただく中で共通しているのは、患者様やご家族様からいただく感謝の言葉にやりがいを強く感じているということです。日々様々な相談対応をする中で、「どのように対応すれば良かったらう」、「よりいい案があったのではないかと、自身の対応、支援に疑問を感じる場面は多くあります。悩みながらも支援を続ける中で、患者様やご家族様からのあたたかい感謝の言葉をいただいた際は、励みとなり、自信にも繋がります。

また、似たようなケースの相談を受けた際に、過去の対応を参考にしながら以前よりよい支援や対応ができた時に、自らの成長を感じています。

他職種・他機関との連携

地域医療連携課は、他職種他医療機関と関わることもとても多い部署です。院内では医師、看護師、心理士、作業療法士、事務等と常に連携し、患者様の対応にあたっています。

また、市町村、地域包括支援センター、社会福祉協議会、保健所、保護観察所等の様々な機関と受診や入院の相談、患者様のケア会議の場面で関わることも多いです。

一人の患者様の支援を考えていく中で、多角的な視点を持って支援していくためには、他職種、他機関との連携はとても重要です。ケースが複雑になればなるほど、幅広い視点や意見は大変参考になり助かっています。

精神保健福祉士を目指したきっかけ

小学生の頃に「なりたい職業」という課題で、学校の図書館で資格の本を調べていたのですが、その時に社会福祉士という仕事を知り、漠然とカッコいいと思い福祉関係の仕事を目指すことになりました。



大学選択の際に、社会福祉士と精神保健福祉士を同時に取得できる大学があることを知り、その時初めて精神保健福祉士という仕

創立56周年記念事業

創立56周年を記念して、記念式典・症例研究発表会、特別記念講演会が行われました。昨年に引き続き、リアルでの開催となりました。

記念式典 令和5年10月31日(火)

開会の言葉
理事長挨拶
閉会の言葉



症例研究発表会 令和5年10月31日(火)

当グループでは、医療従事者としてのスキルや知識の向上を目的とし、日々の業務での経験や統計データをもとに症例研究を行い、その成果をまとめ創立記念事業にて発表しています。発表会では病院長やスタッフより活発な質問や意見交換も行われました。より優秀な研究発表には優

〔研究発表題目〕

発表者	題目
大島麻由美	陰性感情を抱きやすい場面における看護師の自己理解の必要性とストレスコーピングテストを用いた自己の精神症状に合わせた生活を送るために、クライシスプランを作成・活用して
鈴木舞子	弾性ストッキング着用患者へ皮膚観察と保湿を実践した効果とスタッフの意識向上を目指す
堀内瑠香、飯村侑奈	無為自閉に過ぐす患者に対する個別介入について興味関心に着目し活動性の向上を図った事例
有賀朱音	若年性認知症患者の途切れない支援を考へる当法人内事業所へのアンケート調査から
鳥羽田真利	経管栄養のマニュアル改定、院内の共通認識の獲得を目指して
真家美月	リワークデイケアプログラムの効果と課題「振り返り・目標立案」プログラムに注目して
齋藤佑美	

〇優秀賞

今回優秀賞に選ばれたのは、「自己の精神症状に合わせた生活を送るために、クライシスプランを作成・活用して」を発表した、コスモス病棟の鈴木



秀賞も贈られます。講師として、茨城県立医療大学保健医療学部看護学科准教授の糸領一郎先生にお越しいただき、研究発表の講評と優秀賞の選出もしていただきました。

事を知りました。大学入学当初は、精神保健福祉士も取得できたらラッキーと安易に考えていたのですが、大学での勉強や障害福祉施設・精神科病院での実習を通して、精神保健福祉士の仕事にとても興味を持つようになりました。3大障害※1の中でも特に精神障害は、目で見て分かりづらく、周囲の理解を得ることが難しい現状があります。この現状をどうにかしたい、生きづらい生活しづらいつ感じている人の力になりたい、と強く思い、精神障害を持つ方と多く関わることのできる精神保健福祉士を目指すようになりました。

栗田病院グループの働きやすさ

私には2歳になる子供がいるのですが、生まれてすぐの1か月間育児休暇をいただくことができました。この大切な期間を妻と一緒に近くで子供を見守ることができたのは、非常に貴重な経験でした。男性職員の育児休暇は、社会的にはまだまだ進んでいませんが、当グループでは早く認めてくださいました。育児休暇が明けたあとも、保育園からの急な呼び出しで早退やお休みをいただくこともありますが、「子供のことを優先してね」、「早くよくなるといいね」等の気遣いの言葉もかけていただきます。子育て世代に優しい職場であると感じています。

今後の目標・展望

たくさんの方の経験を積ませていただいた現在も、患者様やご家族様への支援対応は、試行錯誤を繰り返しながらは尽きません。その一つひとつで自身のベストな支援対応ができるよう、上司や先輩から学び、同僚とも相談しながら成長していきたいです。

当グループでは、従来からの統合失調症・うつ病・認知症などに加え、アルコール依存症・周産期メンタルヘルス・思春期青年期の精神疾患など、診療対象の範囲を広げ、より地域のニーズに沿った診療に取り組み始めています。様々なケースワークに対応できるよう、研修等に積極的に参加し、自身のスキルアップに努めていきたいです。

※1「3大障害」：障害者基本法により、障害は「身体障害」、「知的障害」、「精神障害」に大きく分類されると定義されている。

本インタビューは下記から動画にて閲覧可能です。



舞子さんでした。鈴木さんにはその努力を称え、賞状と副賞が贈られました。

特別記念講演会 令和5年11月14日(火)

今年度は特定非営利活動法人カンフォーターブル・ケア普及協会の代表理事を務められる南敦司先生をお招きし、「カンフォーターブル・ケアのエッセンス」と題し、ご講演いただきました。南敦司先生は、看護師免許取得後、主に精神科病院にて従事され、そのご経験の中で「認知症ケアメソッド カンフォーターブル・ケア」を開発。その後、現在のカンフォーターブルケア普及協会を設立され、病院、施設、地域社会での認知症看護・介護の質向上を目標に、認知症になっても安心してケアを受けられる社会の構築を目指す活動を続けています。

今回は、座学による知識の習得だけでなく、実演を交えた体験型の講演であり、現場スタッフにとって貴重な機会となりました。今回の学びを参考に、患者様一人ひとりに寄り添った治療やサービスが提供できるように日々の業務から意識して取り組んでいきたいと思



診療案内

外来担当医一覧表

	診察室	月	火	水	木	金	土
午 前	1 診	栗田	疋田	安部	栗田	鈴木	正司
	2 診	安部	高橋	堤	木滝	堀	第2週 鈴木 (変則あり) 第3・5週 吉川
	3 診	堤	早坂	木滝	増本	疋田	佐々塚
	5 診	須能		正司	黒田	翠川	月田
午 後	1 診	栗田	佐々塚	安部	栗田	鈴木	
	2 診	安部	高橋	木滝	木滝	増本	
	3 診	黒田	早坂	須能	月田	疋田	
	5 診	隔週 藤沼					

初めての外来受診・入院を希望される方へ

1. 電話で患者様の情報や現在の状況をご相談下さい。

2. 次にケースワーカー（相談員）が詳しい話を伺い、その後ご予約をお取りします。

※現在他病院を受診している、もしくは受診していた場合は紹介状が必要になります。

※当日の状況により、予約内容が変更になる場合がありますので予めご了承ください。

■ = 内科

受付時間 8:30～11:30 / 11:31～16:00
診察時間 9:00～ / 13:30～
*精神科外来は完全予約制になります。
*当日のご予約は行っておりません。前日までにご予約をお願い致します。
予約電話対応時間 月～土（祝日を除く）9:00～17:00 TEL.029-298-0175

関連施設

サテライトクリニック

「こころのクリニック水戸」 〒310-0801 茨城県水戸市桜川2-5-15 TEL.029-231-0150 FAX.029-231-0152

障害福祉サービス事業所 自立訓練(生活訓練) ショートステイ

「くりの実」 〒311-0117 茨城県那珂市豊喰505 TEL.029-295-1834 FAX.029-353-2223

障害福祉サービス事業所 グループホームくりの木

「第1くりの木」 「第2くりの木」 〒311-0117 茨城県那珂市豊喰1152-1 TEL.029-295-7652
「第3くりの木」 〒311-0117 茨城県那珂市豊喰1152-1 TEL.029-295-7680 FAX.029-295-7681
「くりあん」 〒310-0004 茨城県水戸市青柳町3429-2 TEL.029-231-2280 FAX.029-231-2281

就労継続支援B型事業所

KURITAワークサポートセンター
「Work-Work」 〒310-0004 茨城県水戸市青柳町3923-5 TEL.029-231-7066 FAX.029-231-7067

認知症デイサービス

「クリクリ市毛」 〒312-0033 茨城県ひたちなか市市毛上坪1186-2 TEL.029-275-0262 FAX.029-275-0263
「クリクリ金上」 〒311-0022 茨城県ひたちなか市金上1031-1 TEL.029-271-1607 FAX.029-271-1608

小規模多機能型居宅介護施設・認知症グループホーム

小規模多機能ホーム「クリクリ」・認知症グループホーム「クリクリ」
〒311-0117 茨城県那珂市豊喰140-17 TEL.029-352-0016 FAX.029-298-7750
認知症グループホーム「クリクリ田彦」
〒312-0063 茨城県ひたちなか市田彦950-48 TEL.029-275-8701 FAX.029-275-8702

アクセスマップ

